

# 守護神 ゴーレス

第9話 前編  
『国際通り改造計画』  
WE BILLED THIS CITY

作：みかつきなお

挿絵：ぜんざいナオミ

## 第9話

### 国際通り改造計画

We billed this city

世界的建設アクトユエーテー機メーカーである桐丸重工のお膝元であるがゆえに、世界的にも今回の事業は注目されている。

### 奇跡の1マイル

沖縄県民はいつも思つていた。国際通りがあとすこし広ければ。

慢性的な渋滞を抱えた那覇市中心部は二段階の都市計画で変貌を遂げつつあった。

国際通りの店舗をモノレールの通る久茂地川沿いに移転。久茂地川を半分暗渠化し道幅を広げる。その移転は国際通り北側の店舗。市場通りのある南側の下町を残して、大型建物を有する北側を一度移転させ、2車線分を一気に解体、建設をおこなうという工法を取ることになった。

これはアクチュエーター機による解体と建築の理論の実践の場所であった。20年前までのクレーン、パワーショベル中心の工法からアクチュエーター機主体の工法へ。そして旧来の都市を解体してさらに再構築する作業を短期間で行う事の可能性へのテスト。

若狭埠頭まで。

埠頭ではタンカーを改造した大型輸送船が停泊し、国際通りの残骸を積み込む予定であった。

2月上旬土曜日朝。沖映通りからすこし奥に入ったパラダイス通りにある八幡家では(株)八幡アクトユエーテー重機の現場事務所が開設されていた。

彼らの任務は那覇タワー展望台を切り取って再利用するということだった。これが国際通り改造計画の目玉であり、自分たちの実力を見せつけるステージとなるのだ。現場は気合いと緊張、期待が高まっていた。

「みんながんばつてきてよー。ここで昼ごはん炊き出しますからねー。」

「よっしゃー。ではメンバー、バイロット上連天舜、玉掛け安全保安員葦原みづき。指揮車両オペレーター葦原小

雪、現場監督は俺、八幡裕。そしてここ総司令本部CIC

では炊事・受付は八幡小夜子・城間貴子、そして総司令官は八幡幸賢。以上の布陣で行く。」

「で、現場監督つていつても他社との共同作業でしょ。向こうの監督の指揮があるでしょ。監督なにするの?」

小雪の指摘は國星だった。

「他社との連絡関係ですよ……。」

「まあいか。だんだんうちの仕事の形も決まっていくとと思うし。」

小雪はファイルを開いて、

「あと比嘉辰巳はニライ建設さんのエンジニアに派遣。稻田作太郎、東恩納邦夫はダンプ運転手に、人材派遣業としても今日からいいスタートね。」

「……ということでみなさん現場に向かいましょう。」

「ちょっととま！」

ラップを片手に紋付袴の幸賢が家からしてきた。

「一同社旗と国旗に向かって敬礼！」

みんな気をつけをして右手を額にかざして敬礼らしい感じにしたところでラップを吹き始めた。

「パッパラパ……。幸賢は止まつた。

「オジー大丈夫か？」

「息が続かん。」

### 兼光の過去

兼光真は上空1000mの高度から大型旅客飛行船のカフエで国際通りを見ていた。

今日はここで一日中一気に変化してゆく国際通りを見ながら仕事をするのだ。これを成功させなければ桐丸重工は桐丸グループ内部の立場を悪くしてしまう。しかし完璧なプランだ。事故も問題もなく進む。

なんてつたって、子供達に人気のゴーレスさんが作業に参加してくれるからな。がんばつてくれたまえ少年達。

ピエロの役は君達に譲つてやる。秘書桐江がミーテイングルームからカフエに入ってきた。

「社長。あと15分後ニライ建設から最初の報告が届きます。」

「あそ。今日はいつも見慣れた那覇の町が違つて見えるよ。仕事をたくないねえ。ここで詩を書き続けていた

い。」

「詩ですか？」

「そう詩。高校の頃、那覇タワーの回転レストランでコーヒーヒーで一日中粘って作詞をしていたんだ。」

「作詞？ああ、バンドやつてたんですよね。なんか高校時代の話とか普段なさらないから。」

「一応高校時代は沖縄なんだよ。お袋が強引に沖縄の高校に願書だしたんだ。もちろん俺は反抗した。でも俺はこの沖縄の思い出がなければ、俺は血縁だけで本物のうちなんちゅでは無くなる。これでよかつたんだ。」

高校の時、国際通りで買い物をして、ゲーセンに行つて、レコードを買って。この思い入れがなければこの事業に本腰をいれられないよ。」

地元の人間も観光客も楽しい国際通り。俺が作りたいのはみんなが思い出に残る町を作りたいんだよ。」

久しぶりに真君が少年のような目で理想を語っている。桐江は兼光の思い出と理想論の聞き役になつた。

「三越ビルを解体するのは残念だけどな。」

「でも地下ショッピング街もできてこれから町に思い入れを感じる人も多くなることを考えると楽しいですね。」「ああ、思い出を語ると長くなる。今日の遊覧船に乗つて

る連中はビル解体を見たいやつと懐しみたい奴だけだ。」

誘導員みづき

那覇タワー解体班業者は沖映通り沿いの空き地4台のアクリュエーターと一緒に小さなブレハブで石油ストーブを囲んで、年配の作業員数名に舜と裕一が座つて指示をまつていた。

「にーにー達若<sup>な</sup>いなー、高校生でアクリュエーター操縦できるなら勉強はできるでしょ。」

「いやあ、これだけがとりえですから。」

プレハブのドアが開いた。

「着替えてきたよ。」

男物の警備員の制服に着替えてきたみづきが入つてきただ。男物Mサイズでもすこしづかぶかなのが気になつてた。

「あいやーかつこいいね、ねーさん。」

「今日は楽しくやろうねー。」

沖縄最大のプロジェクトとということに気負うことなく普

段通り気楽な中午作業員達ではあつたが、舜とみずきには  
ちよつと怖い気持ちが強く感じられた。

「変かな。舜？」

みずきはすこし恥ずかしそうだった。

「変でも作業服だし。」

「舜、つっけんどんどんに返すなよ、みずき、ちょっとボーキ  
ッシユでかわいいんじやない。」

みずきは裕一に話しかけた。

「講習を受けて自信はあるんだけど、一番気になるのが私  
がなぜ玉掛け安全保安員なのかつていうのが。社長おしえ  
て。」

「一番舜の状態がわかつて指示できるのがみずきーやし。  
お前しかいない。」

裕一の言葉がちよつと恥ずかしかつたみずきだった。

モニターのライブフォン画像に那覇タワー斑現場監督の  
ニライ建設の安里課長が映つた。

「みなさんおはよう。安里です。もうすぐ現場上空に作業  
飛行船到着します。各パイロットは登場して待機ね。八幡  
さんのところは新人だから先輩はフォローしてください。

一応知る人ぞ知る県民のアイドルだからいじめたらだめだ  
よ。」

「監督了解。はいみなさん、よんなーよんなー（ゆっくり  
落ち着いて）はじめましょか。」

作業員達は立ち上がってタバコを消して外に向かってい  
く。

ニライ建設は準人型アクチュエーター機桐丸重工0-1年  
型ハンドマン2機と解体掘削専用機トロイリブリマス0-5  
年型バッファロー1機を那覇タワービル解体に用意した。

空に次々と飛行船が現れた。作業用飛行船の編隊だ。

この国際通り改造作戦のために那覇空港B滑走路飛行船  
デッキと那覇軍港の空きスペースをフルに使って全国の作  
業用飛行船を集めてきたのだ。それに遊覧飛行船も参入  
し、沖縄の空のダイヤは過密になつてゐる。

那覇タワー斑の飛行船2隻それぞれ第1ハンガーホー、第  
2ハンガーホー船が上空100mまで降下、吊り下げ用ワイヤ  
ーが降ろされてきた。各アクチュエーター機への取り付け  
が始まつた。

「みずき、ゴーレス起動します。出力30%から省電力作  
動開始。」

「手指各関節の駆動を確認して。グーとパーから始め  
て。」

#### ゴーレス起動開始

舜とみずきの仕事が始まつた。少し離れた指揮車両の小雪もゴーレスから送られてくる舜の脳波とゴーレスの作動状況が送られてくる。

「基本的に楽勝よね。舜の脳波も良好。あとは高所恐怖症……。そんなにたいしたものじゃないといつてたけど。」

比嘉辰巳は那覇タワーのはす向かいにあるオーパビルに設置されたオペレーションセンターで10名のSEオペレーターとともに各アクチュエーターの状況を確認している。

「防護壁班35号ハンドマンさん、もう一度握ってみて。」

グリップしたあとのすこしリアクションが遅い。33号につづいて2台目だ。

「ちょっと33号と35号メンテ入ります。」

辰巳は直接接続で昨日チェックしたはずの機体の本物を再び触らなくてはならなくなり、山形屋跡地の駐機場に向かうこととした。

「フックを止めたら第一拘束ベルトを1m25cmほどひっぱって、『手ごたえ感』のフィードバックをデーターで確かめて。こちらから能動的に動く脳波は機械動作に繁榮で起きるけど、受身の感覚は画面上での簡略表示『人間なら痛い。』などを参考すること。アクチュエーター機の基本だから。そしたらベルトをもう一回ひっぱって拘束具合を再確認。」

なんかさつきからマニュアルを割り増ししたようなことを連呼されているなあ。工場の時よりみずきはき真面目な感じがする。年取つたら小うるさいおばさんになるなあ。

「『小うるさい嫁さんになるだろう。苦労するよ』とか余計なこと考えない。今は本物の仕事中、拘束ベルトは命綱！ 命かかるてるから！」

「了解。でも俺の心は読むな。無駄にエネルギー使うな。」

みずきの能力は統率力、巫術者の力をまとめる為にお互

いの心を読むのに優れている。だが巫術の時だけだ。今日はまたいつもの冗談で心を読んだフリとかそういうことだろうか。

「あいつの気持ちはどういうつもりだろ。あいつの心の中では俺は……。小うるさい嫁かあ……。微妙にちがうけどやはり心読まれた？」

舜は脳波で動くゴーレスを動作させるための思考と、解説しそうぎるみずきのことを思う感情の板ばさみで頭の中が混乱することを強いられていた。

みずきは見上げるゴーレスが上空の飛行船に吊り下げられて飛翔する姿を心待ちにしていた。

周囲では警備員達が同じようにバイロットとやりとりしていったが、みずき達が一番口数が多かつた。

次々と防護壁ユニットを運んだ飛行船が国際通り県庁側から一列に現れてきた。

「あれが降りてきたらよいよ作業開始だね。」

「はい、黙つて第3拘束ベルト締めること。」

「はい……。」

「えー！」

空き店舗の前に白い箱を棚に並べた露店からは子供達の声が聞こえてくる。

「おじさん、ゴーレスのプラモないのー？」

「ごめんね、数が少ないので売り切れちゃった。イヒカはあるよ。」

「えー！」

小学4年生くらいの男女の子供達に鵜飼が割って入った。

黒いコートに毛皮のマフラー、オールバックに強面の鵜

9時になり完全に人払いされた国際通り、逆に周りには見つっていた。市場通りのアーケードには雑然とした土産物店や日用品、乾物店などの間に『御自由に屋上へ』と書かれた入り口に人が吸い込まれてゆく。いつもなら朝はしまつている店も今日は店を開けてにぎわっている。

それでも相変わらず鰐節くさい市場だった。

そんな市場の雑踏に陸上自衛隊第11機動警備大隊副

長・鵜飼三佐と船越三曹が現れた。

「あの露店、子供があつまってるな。」

飼の登場に子供達が一瞬たじろいだ。

「プラモ屋のオヤジよ、陸自機動警備隊のハヤブサは置いてないか。TD-20だぞ、ゴーレスと一緒に戦ったアレだ。」

「あ、はい、あります。」

「子供達、ゴーレスと戦ったハヤブサは知ってるか？」

「ちょっととちょっとと飼飼さん。」

子供達が怖がってる様子なので、ラフな格好で温和な顔の船越が子供達に説明した。

「実はね、あのハヤブサのパイロットが僕達でーす。」

子供たちがいっせいに笑った。

「うそやー、ヤクザとオタクだー。」

「じえーたいっぽくないねー。」

飼飼は店主に自衛隊IDを見せた。

「ほ、ほんものですか。みんな本物のハヤブサのパイロッ

トさんだよ。」

「へー、かっこいい！ 必死でゴーレスを助けていたのが  
かっこよかったよー。」

子供達は帽子やノートにサインをねだつた。

「船越、一応俺達有名人なんだよな。」

飼飼の大人気ない態度に呆れぎみであつたが、たしかに

あの百名ビーチ事件はネットで雑なアニメにされたり、ゲームになつたりしただけではなく、ドキュメンタリーで飼飼らもインタビューに出てはいた。

ネットなどの無秩序なメディアは別として、事件の大きさにくらべてマスコミは意外に冷淡な態度なのかもしれない。マスコミは荏田がリーグしたウルスハン事件の防衛省の隠蔽に関するニュースがここ数ヶ月続いたが、ニュースがそこにシフトしたのは桐丸重工を悪く書くことを厭厭する自然な報道統制が働いたのかもしれません。ところで店主、デスマイトものはあるか？ ベトナム

だ。」

店主はこつそりと問題の品を後ろのダンボール箱から出した。

飼飼は表題だけの白いパッケージのDVD一枚3000円ほどを合計2万円ほど購入した。

生死を問わないアクチュエーターの非合法の試合。こんな怪しい出店などでしか出回っていない。

「俺の目的はわかるだろ。」

「荏田さんを探すんですね。」

「まあそれもあるけど、それ以上に俺達は生き死にのある戦いを考える材料が欲しいんだよ。映画ではなにも教えて

はくれない、いざれお前ももつと恐ろしいところを見るはずだ。」

「はい……。」

「まあ暗くなるな。今日はアクチュエーターの日のあたる世界の活躍を楽しもう。」

今日うまく休みを取った二人はプラモ屋に集まる子供と同じく沢山のアクチュエーター機の活躍を見ていたい、ただそれだけの休日を楽しみたいだけの一 日になるはずだった。

「お、ハンドマンとヘラサギがスタンバって来たな。」

### 作業開始

9時30分防護壁が空から次々と降りてきた。ハンドマンが下で受け止めて降ろし、ステイクドライバーで釘を地面に打ち込む。これで最大20mの巨大防護壁は地面に固定される。この内側での解体工事が粗いものになつてもしつかりとガードしてくれる鉄の網だ。

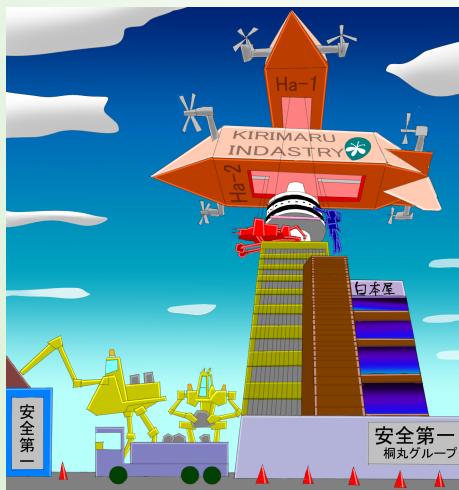
拘束具で固定したゴーレスとハンドマンは同じ飛行船で

吊り下げられて上昇して行った。そして警備員が乗ったゴンドラも上昇してゆく。

下を見ちやいけない。下を……。

那覇タワーの回転展望台の真上の高さまで上ったところ

でゴーレスは西面にハンドマン2機は南と東に降下し、回転展望台を梱包するようベルトを張る作業に移つた。



ここからはベテラン作業員のリードが始まる。

「ゴーレスさん、ちゅーじく（強く）ひっぱって。」

「はい、真栄平さん。」

「もつと！ ばんない（どんどん）！」

「はい！」

「と！ とー！ とーー！ あげー、引きすぎよー。」（ス

トップ、ストップ、あらー、引きすぎだよ。）

「え？」

「まあいいさー、安里さんどうねー？」

警備員らと同じゴンドラに乗って苦笑いした監督の安里

がモニターに出る。

「はい、圧力計データー的におっけ／よお。次のベルトに移つてください。」

舜は工事現場の空気に困惑したが、これだけの人間の綿密なチェックを通過しているので心配しなくても問題ないなと思った。

三越ビル向かいの屋上ではゴーレスの応援団が集合していた。

『八幡アクチュエーター重機 我らがゴーレス』

と書かれた横断幕はゴンドラの上のみずきからも見えた。

「わかつたよ、ウオドパネルで『異世界の状態』が普通であることを確認すればいいんだな。」

「そういうこと。これも仕事。広い宇宙であんたにしかできないことね。」

応援団には琉球大学理工学部と医学部の辰巳と小雪の後輩達が数名駆けつけた。舜とみずきはこのことはまわりに教えていない。あの事件のことは余り言われなくなかった。今日のような普通の作業を積み重ねてから学校には公開したいと考えていた。

キャンピングカー型の指揮車両の中で山積みのユニットに囲まれて小雪はモニター上のゴーレスの駆動データーとらみ合いをつづけていた。

裕一も隣に座ってパネルをウムイの中核『龜』かめに接続させた。手をかざす、パネルの中の水が反応して図像を作つてゆく。

いつも通り二つの円、舜とみずきを示す円だ。

そして円ではなく点がパネル上に点在していることに気がついた。

これは他にも能力がある人がいるって事?

「ちょっと小雪さんウオード粒子のデータと照合させてみたいんだけど。」

「OK。津堅島のオノゴロの計測データを呼び出してみるわ。」

この場所での計測値。

天然派生ウォード80 人的派生ウォード15

UNKNOWN 5

アンノウン?

「はー? 小雪さんアンノウンって普通でてくるものかな。」

「今までなかった。ちょっとまで、オノゴロに質問を打ち込んでみる。」

「オノゴロのAIよりアシハラ先生へ、知らないものは知らない。動物でも植物でも人でも自然現象でもない。知らない。知らない。知らない。知らない。」

小雪はこの状況に不安を感じた。

「ちょっと裕一君、各所に連絡して。不具合がどこかで派生していいのか。」

「わかった!」

つづく